

研修医の声

初期研修医としての一年を振り返って

立川総合病院

野村 将人

初期研修医としての生活が始まり、一年が経ちました。医学生頃は、教科書や講義を通して病気について学び、知識として患者さんを理解していたように思います。しかし実際に臨床の現場に立つと、同じ疾患であっても患者さんの年齢や生活背景、抱えている不安は一人ひとり異なり、教科書通りにはいかないことを日々実感しています。診断や治療の知識だけでなく、患者さんの話を丁寧に聞き、その人にとって最も適した医療を考えることの重要性を強く感じるようになりました。

特に救急外来での経験は、研修医として多くの学びを与えてくれています。救急では限られた時間の中で症状の原因を考え、重篤な疾患を見逃さないよう迅速に判断する必要があります。初め頃は、目の前の患者さんにどのように対応すればよいのか戸惑うことも多くありましたが、指導医の先生方の助言や診療を間近で学びながら、少しずつ診療の流れを理解できるようになってきまし

た。一方で、自分の知識や経験の不足を痛感する場面も多く、日々の診療の一つ一つが学びの連続であると感じています。

また、研修を通して強く感じているのは、医療が多くの職種の協力によって成り立っているということです。診療の現場では、医師だけでなく看護師、薬剤師、臨床検査技師、放射線技師など多くの医療スタッフが関わりながら患者さんを支えています。患者さんの状態や生活背景についてスタッフ間で情報を共有しながら診療を進めていく中で、チーム医療の大切さを実感するようになりました。多くの方々に支えられて自分が診療に携わっていることを日々感じています。

まだまだ未熟ではありますが、指導医の先生方や医療スタッフの皆様を支えられながら日々診療に向き合っています。これからも一つ一つの症例を大切に、知識と経験を積み重ねながら、患者さんに寄り添い信頼される医師になれるよう努力していきたいと思っています。



病院内にて研修医集合写真（右から2番目が筆者）